

何のために人は学ぶのか

敬天愛人

「教えて褒める」学校づくり

優れた授業の腕を持つ教師が、素晴らしい学校づくりが出来るとは限りません。スター選手が、必ずしも名監督になれるとは限らないのと同じであります。

管理職になって赴任する際、不遜ながら私の心の奥底には、もはやピッチには立てないのだという若干の寂しさがありました。

教師として最もやりがい、充実感を感じるのは、やはり授業をしているときです。

管理職になる前までは、一時間、一時間の授業が本当に楽しくて仕方ありませんでした。これほど楽しいのに給料までいただいて……そんな感じで日々過ごしていたのです。

さて、校長として赴任する際、経営に長けているなどは全く思ってはいませんでした。

経営と名の付く事柄に疎い人間だからこそ、ゼロからの学びという思いで出立したものです。強いてあげるならば、私なりに抱いていた学校づくりのイメージは、次の一点にありました。

一、軸のぶれない学校経営をしよう

かつての勤務校でのことです。教頭として赴任して一週間もしないうちに、あるクラスが崩壊してしまいました。その予兆は、前年度から続いていたといえます。

まえがき

担任の顔色も悪く、学校に来ることが重荷と感じ始めていました。このまま静観していれば、担任は倒れてしまうと私は思いました。

直ちに、校長に対し、次の二つのどちらかを選択すべきだと進言します。

①算数か国語の教科に限り、クラスを半分ずつに分け、片方を私が受け持つ。

②最も落ち着いていない子、三名を取り出して（クラスから離して）私が授業を行う。

当時、教頭として週三時間の授業を行っていましたが、率先して私が加わらなければ、担任を守れないという信念からの進言でした。しかし、私の進言は、取り上げられません。新年度が始まって間がないこともあったでしょう。いずれにしても校長として大きな決断を必要とするものです。しばらくすると、ますます子どもたちの荒れ方はひどくなり、他の学年にも影響が出てくるようになります。

その頃、職員会議の終わりに、一人の職員が発言します。

「いけないことを許すわけにはいけません。いけないことはいけないと、皆さん、厳しく叱りましょう」

ベテラン教師の発言です。職場では、リーダー的な存在でもありません。

この発言に、和するように校長先生が言います。

「そうだ！ いけないことは断固として叱ろう」

このやりとりを聞いて、赴任したばかりの私は、黙っていることは出来ませんでした。

そのような方針であれば、荒れている子は、ますます荒れていくしかありません。

発達障害のある子は、小さい時から失敗経験を重ね続けています。毎日のように叱られ、注意され、時には大声で怒鳴られ、家庭にまで連絡され、家ではさらにこっぴどく叱られ、そのたびに傷つき、「やっぱり僕は駄目な人間なんだ」と、その都度、思い込んでしまうのです。

まさに負のスパイラルに入り込み、自分の感情をコントロール出来ない状態で、SOSを発信している子どもたちです。あの子たちの言動を見て、二次障害を起こしていると私は感じていました。

教頭である私は、当然、校長の指示に従うべきでしょう。しかし、荒れているあの子どもたちを守らなければという思いで、次のように発言しました。

「ちょっと待ってください。皆さん、入学以来、毎日、人一倍叱られ続けてきたのは、あの子どもたちではありませんか。その結果が、今の荒れた現状にあるのです。これ以上、叱って改善できるのでしょうか。自分のささやかな頑張り、努力を先生に認めてほしいと、あの子たちは思っているはずなんです。だからこそ、正しいやり方を丁寧に教え、かすかな変化、わずかな頑張りを力強く、それでいいんだ！ と褒めてやるべきではないでしょうか。基本方針は、厳しく叱るのではなく、『教えて褒める』にあると、私は思います」

私の発言で職員室は、重苦しい雰囲気となりました。

管理職の意見が真っ向から違うのですから、戸惑うのは当たり前です。

最初に校長先生に進言してからひと月経ったころ、再び校長先生に進言しました。もはや、一刻もほつてはおけないという状況にあったからです。

そして、ついに、六月初旬、三名の子に週十時間、別教室で授業を行うことになりました。算数と国語を毎日二時間、特別教室で授業を行うのです。むろん、校長先生の決断によるものです。その当時、職員も半信半疑で私の話を聞いていたと思います。

ところが、半年ほど経ったときのこと、司書の先生が、涙を浮かべながらわざわざ報告してくれたことがあります。これまで図書室に来て、机の上をシューズのまま飛び回っていたあのタケルくんが、借りた本を返す際、お礼を言いながら、散らかった書棚まできれいに整理して行ったというのです。その頃から徐々に、いきなり叱るのではなく、「教えて褒める」ことが職員にも少しずつ浸透していき始めました。

三学期後半からは、親学級に戻り、三名とも他の子どもたちと同様に授業を受けられるようになりました。六年生に進級してからも、大きなトラブルを起こすことなく立派に巣立っていったのです。

このような経験から私は、学校経営の基軸がいかに大切であるか、そのことを強く意識することとなりました。

いかなる時も「教えて褒める」こと。これは、師である向山洋一氏から学んだ事柄です。このことを基軸とすべきであるという確信を持つようになったのです。

さて、私の校長としての経験は四年間しかありません。とはいえ、経営の素人であることを自認する私です。故に、新任地に赴任する直前まで、時間を惜しむように、経営に関する書物を手当たり次第、読みあさっていました。

その頃から、私のよりどころとなったのが、向山氏の勧めで購読していた月刊誌『致知』でした。人間学を学ぶ雑誌『致知』を通じてさらに私の読書の領域は広がります。

知の巨人・渡部昇一氏、稲盛和夫氏、藤原正彦氏など数え上げればきりがありません。

時には、子どもたちに講話するテーマとなったり、学校経営の柱にもなったりしていきます。校長自ら、率先して学び続けること。これが経営を預かる身の定めだと、常々私は思っています。

そのせいか、いつの間にか校長室の書棚が、満杯状態となっていました。

元来、不器用な私です。遅々たる歩みをまとめることにどれだけ意味があるのか、私にはよくわかりませんが、私を支持してくださる若い先生方から、ぜひ一冊の書としてまとめてほしいという希望もあり、その声に背中を押され、このような形としてまとめることにしました。

本書の大半は、学校だより「大門坂」で書き綴ったものを再編集したものです。また、本書に登場する子供たちも、私の回想であるユキオ以外の子供たちはすべて仮名です。

「大門坂」は、校長としての経営方針や、今、学校で取り組んでいることなど、その折々に書きたいなと思ったことを自由に発信してきたものです。通常ならば、時候の挨拶から書き出す

ものですが、そのような通例を一切排し、書きたい事柄の核心に一気に筆を運ぶという手法で、やや型破りの「学校だより」だったと思います。

幸い「大門坂」は、地区の方にも好評で、時には、見知らぬ方から激励の手紙やお礼の電話までいただきました。「大門坂、いつも楽しみに読んでいます」という一言に支えられ、発信し続けることが出来たと思っています。

月田の地区は、日本の良さが色濃く残っている素晴らしい土地柄です。

学校医の宮島啓人先生、学校歯科医の宮島郁夫先生、歴代の月田奨学会会長をはじめ、本当に多くの方々に支えられた四年間でありました。心より感謝しています。

本書が、私に続く若い先生方に、少しでもお役に立つことがあれば幸いです。

最後に、いつも少年のように夢を追い続け、家庭を顧みることの少なかった私を、思う存分自由に羽ばたくことを認め、陰で支え続けてくれた家内に感謝し、ペンを置きます。

平成三十一年三月吉日

小林 幸雄

目次

まえがき

第一章 子どもたちとの触れあい 13

一途な思い／目に焼き付いた光景／最近流行る言葉／掃除を頑張る子どもたち／
素晴らしい班長に拍手！／お天道様は見ている／少年時代・夏の思い出／
習慣の善し悪しが大きな差となって現れる／人の心に光を灯す／
熱い夏を終えて……／苦いラーメンの味／人の道における根本

第二章 敬天愛人を活かした学校づくり 39

月田小のお宝・扁額「四箴」／敬天愛人を校訓に！／「月田っ子宣言」の策定！／
学校・家庭・地域で……同じ価値観を共有する／学級通信からの発信／
月田を思い、月田を愛する子に……／月田っ子宣言の活用／
人は何のために勉強するのか／
いかなる場においても「教えて褒める」を基本方針とする！

第三章 眠育の推進 67

睡眠の大切さ(一)／睡眠の大切さ(二)／睡眠の大切さ(三)／
眠育の推進にご協力を！／第一回睡眠実態調査を終えて／今後の方向性／
保健委員会による眠育集会／眠育講演会を終えて……／第二回睡眠実態調査

第四章 いじめについて考える 91

卑怯なことをしない……学校経営の柱の一つとして／六つの禁じ手／
校長の責任において対応します／ミスした時、弱い人だけに言うのは卑怯です！／
告げ口の文化と相談の文化／緊急のいじめ対応の講座／
研修に使用された「小林の講座資料」

第五章 校長講話は授業である 115

名文・詩文への誘い／名文・詩文暗唱の奨め／世界で一番歴史のある国／
日本の植物学の父・牧野富太郎／
巨大地震発生時の対応くもし、登校中に地震が発生したら……
目標を持って過ごそう／挨拶の意味を考える／真似をするのは、いけないのですか

第六章 読書のすすめ 135

先人は、片道一里半の夜道を通い続けた／目を開かせてくれた書物／
強制してでも本を薦める！／読書のすすめ「福井の底力」／
一学期おすすめ読書「多読賞」

第七章 卒業式・入学式などに臨んで 147

先祖から受け継いだ命のリレーの中の今を生きる／校長先生と約束したこと／
目標を立て、断固とした決意で行動を起こす／言い訳人間、サヨウナラ／
校長先生からの宿題

第八章 校内研修をいかにすすめるか 161

学び続ける教師のみが子どもたちの前に立つことができる／
ノートの取り方で学力向上／春休みから始まる校内研修／「研究通信」の発行／
月田小学校研究発表会「研究集録に寄せて」／英語の授業に挑戦する先生方／
神は底部に宿り給う／続・神は底部に宿り給う／価値ある教師であるために／
『教頭通信・TUKIDA』シャワーのように褒めて褒め続ける！

第九章 小さな極限の設定とそれを乗り越える成功体験 189

小さな極限の設定とそれを乗り越える成功体験／月田小・逆上がり奮戦記／
続・逆上がり奮戦記／有森裕子選手の原点／たかが逆上がりされど逆上がり／
鉄棒名人の新たな挑戦／努力の壺

第十章 雑感 203

現代人と祖先を結ぶもの／春日神社の祭典に臨んで／ノーベル賞受賞に思う／
彼岸花を目の当たりにして／野草ウオッチングの勧め／
恩を知り、恩に報いる／恩を忘れた人に道は開けない／
祖国を思う心／第一回東京オリンピック開催の秘話／
月田の民話版画集／先人の偉業に触れて／
初めての避難所開設／陸の孤島となった山あいの町／

第一章 子どもたちとの触れあい